

六朝書翰の虚実をめぐって

——作家の簡潔な注釈たりうるか——

福井佳夫

旧中国では歴代、おおくの文人が書翰文をかきのこしている。後世、それらをまとめて、書翰集として刊行することも、すくなくなかった。はやい例では魏の応璩が、『書林』という名書翰をあつめた集を編纂していたらしい（注2の斯波論文を参照）。この種の書翰集は、手紙をかくさいの手本になるし、「文辞がとくにすぐれる場合は」文学作品として鑑賞することもできるので、なかなか有用だったのだろう。

では、現代の文学研究の立場からみると、書翰文はどんな価値を有するのだろうか。すると、ほぼ通常の文学作品とおなじといってよからうが、ひとつだけ、他の文学作品が有さぬ独特の価値をもっている。それはなにか。ここでは私が説明するかわりに、近代の魯迅のことばをきこう。魯迅は、友人の孔另境が『当代文人尺牘鈔』という書翰集を編纂したとき、序文をよせてつぎのようにのべた。

衣冠束帯の時にくらべれば、これ（文人たちの書翰——福井注）は確かに真実により近い。だから作家の日記や尺牘から、しばしば、その作品を読むよりもずっと明晰な意見が得られるし、作家自身の簡潔な注釈

でもある。(『且介亭雜文二集』学習研究社『全集』第八巻)

魯迅によれば、「衣冠束帯」(公的な立場でつづることを、こつたとえた)ふうの文章にくらべると、書翰の文は「真実により近い」ものであり、「その作品を読むよりもずっと明晰な意見が得られる」ものだという。たしかに「衣冠束帯」の文、たとえば奏議や論説の類は公式的な見解にかたむきがちだし、賦頌や碑誄の文は虚構や誇張の発言をふくみやすい。それにくらべると、書翰の文は事実を率直につづつていそうだ。それゆえ書翰をよむと、そのひとの真情や本音をすることができ、つまり「作家自身の簡潔な注釈」になりやすいのだろう。

じつさい、現代の我われは、詩や賦の内容をそのまま事実だとはみなさないが、書翰の文となると、その記述は真情や事実をかたつたものだとかんがえがちだ。そのためだろう、いまでも書翰の文は、そのひとの生涯や人となりを調査するさい、しばしば利用されている。そうした「真実により近い」ものであり、また「作家自身の簡潔な注釈」になりやすいところ、すこし慎重を期していえば、すくなくともそうみられやすい性格、それが書翰ジャンルの、他の文学作品が有さぬ独特の価値だといってよかるう。

では書翰文の内容は、ほんとうに「真実により近い」ものであり、「作家自身の簡潔な注釈」になりえるのだろうか。いいかえれば、旧時の文人たちは書翰文をかくとき、つねに真実を叙していたのだろうか。たとえば、私が専攻する六朝期の文学では、おおくの美文でつづられた書翰文がのこされている。これらの美文書翰は、真に真情や事実を叙したものであり、作家自身の簡潔な注釈となりえるのだろうか。

この問題に回答するには、そもそも書翰文とはどんな文章で、どんなジャンルなのかを、よく認識しておかねばならない。それゆえ本稿では、まず、書翰ジャンルの性質、文章の特徴、六朝にいたるまでの歴史、六朝書翰のおおざっぱな傾向(虚構をふくむかふくまないか)——などについて、ざっとみわたしてみよう。そしてそ

のうえで、六朝書翰の内容は、真に信用にたるもので、作家の簡潔な注釈になりえるのか。もし虚構がまじっているとするれば、我われはどう対処すればよいのか等の問題について、私なりの回答をしめしてみたいとおもう。

一 書翰のジャンル

この書翰の文、六朝のころはどのようなジャンルであり、どのような性質を有していたのだろうか。

まず、六朝における書翰ジャンルの位置づけを確認しておこう。書翰の文章は、つとに曹丕の「典論」論文が文学ジャンルのひとつに認定し、

奏議宜雅、書論宜理。

奏と議のジャンルは典雅であるべきで、書と論のジャンルは論理的でなければならない。

とかがたっていた。また六朝中期の劉勰の『文心雕龍』「定勢篇」でも、

符檄書移、則楷式明断。

符や檄、書、移などのジャンルは、明瞭にして断定的な叙法を範式とせねばならない。

と説明している。このように、書翰のジャンルは漢末魏初から六朝にかけて、ずっと文学の一部門だとみとめられていたようだ。さらに劉勰は、彼の『雕龍』に書翰文専用の「書記」という篇をたて、書翰文の源流や創作要領、歴代の名篇などについて、詳細かつ系統的に解説をおこなっている。こうした言及は、当時、書翰が重要な文学ジャンルとされ、すくなくない作がかけられていたことをもがたつていよう。じっさい『文選』をひもといてみると、巻三十九から巻四十三にかけて、「啓」三篇、「牋」九篇、「書」二十二篇の書翰文が採録されている

(奏記や移文はのぞいた)。これらを合計した三十四篇という採録数は、詩賦をのぞけば、ほかのジャンルを押しもつともおおい分量となる。⁽²⁾

だが、そうした採録数のおおさは、文学ジャンルとしての重要度をしめすものとはかぎらない。書翰は実用的文章だったので、かかれる機会がおおかった。だから採録数がおおくなつたにすぎない——といえなくもないからだ。じっさい『文心雕龍』の書記篇は、各ジャンルの最後尾に位置しており、しかも書翰の文は、他の同種の実用文(譜、籍、簿、録など)と一緒に論じられている。いわば末端の、その他大勢のあつかいなのだ。旧中国では、同類のものを列挙するばあい、いっばんにその順序によって価値判断を暗示する。すると、こうした配列のしかたによつて、書翰文の相対的にひくい位置づけが想像できよう。

これは、書翰の文章が、詔勅文や上奏文のごとき政治性がこい文書とことなつて、私的な内容にかたむぎやすかつたからだとおもわれる。中国では伝統的に、文学でも政治性を重視した。すると私的な内容がおおい書翰文は、上奏文などくらべると、かるい文学ジャンルだと意識されがちだつたのだろう。そうした書翰ジャンルの私的さやかさ、これがプラスにはたらくと量的な優勢さにつながり、マイナスにはたらくと内容面での軽視になつていったのだとおもわれる。

つづいて、書翰の内容上の特徴をかんがえてみよう。すぐ気づくことは、その柔軟な性格である。書翰の文は、他ジャンルにくらべると、なんでも、どのようにもかけるといふ柔軟さをもっている。そうした性格については、『文心雕龍』も指摘しているが、「ここでは同書を引用しつつ平易に解説してくれた、褚斌杰『中国古代文体概論』の記述をひいてみよう。

書翰文の目だつ特徴は、たかい実用性と内容の幅ひろさである。書翰は個人相互間における交際の道具で

あり、実用的価値がきわめてたかい。またその内容も、ほとんど限定がない。軍国の重要案件、学術的議論、人物批評、自薦他薦、つらい境遇の訴え、さらには日常での思いなど、なんでも書翰文のなかにもちこめる。書翰文の内容は、社会生活や個人生活のあらゆる方面を、すべてつつみこむことができるのだ。

それゆえ、書翰文がもちこめられる内容は、全ジャンル中もつとも広範で多種多様だといってよい。創作方法においても、ひじょうに柔軟性にとんでいる。叙事もできるし、説理も可能だし、思いのたけをうちあけることもオーケーである。ながいのもよし、みじかいのもよし、まったく作者のおもつままである。「文心雕龍」書記篇では、つぎのようにいう。「詳らかに書の体を総すぶるに、本より言を尽くすに在り。言いて以て鬱陶を散じ、風采を託す。故に宜しく条暢にして以て氣に任せ、優柔して以て懷おもを憚よばすべし。文明らかにして従容なれば、亦た心声の献酬ならん」。書翰文の基本は「言を尽くす」ことにある。自分のいいことを存分にはぎだす。つまりことばをもちいて、内心の鬱屈をつづり、自分の風格や文采を明示するのだ。すると、書翰文をつづる条件としては、自分の性格をわかりやすく表現し、おちついて情感や心情を叙してゆくこと、これ以外にはありえないことになる。要するに、相手がたに自分の「心からの声」を、はっきりと、おちついて、伝達したり応答したりすることだ——という意味である。劉勰はこの書記篇で、書翰の性質や創作要領を明瞭に解説してくれている。(拙訳『中国の文章——ジャンルによる文学史』一三七頁 汲古書院 二〇〇四)

ここで褚斌杰氏も強調されるが、書翰文は、「軍国の重要案件、学術的議論、人物批評、自薦他薦、つらい境遇の訴え、さらには日常での思いなど、なんでも書翰文のなかにもちこめる」し、また「叙事もできるし、説理も可能だし、思いのたけをうちあけることもオーケーである。ながいのもよし、みじかいのもよし、まったく作

者のおもつまま」につづれるという性質をもっている。もうひとつつけくわえれば、文章スタイルも、きちんとした文言や美文はもちろんのこと、口語まじりの行文でも可だという柔軟性を有している。

おかげで、書翰文は他ジャンル（賦や哀誄など）の代用としてかかれることもあって、はなはだ重宝されたのだった（拙稿「六朝書簡文小考」、『中国文章論 六朝麗指』所収を参照）。書翰の文が当時の文人たちにとってこのまね、たくさんかかれ「したがって名作もおおくつまれ」たのは、そうした、なんでも、どのようにもかけるといって、柔軟な性格を有していたからだろう。

ただ書翰文の性格で、誤解してならぬのは、右の褚氏も引用しているが、劉勰の「書翰文の基本は 言を尽くす ことにある」（原文「本在尽言」）という発言だ。ここの「言を尽くす」の真意はよくわからぬが、褚斌杰氏が解説されるように、表面上は「自分のいいたいことを存分にはきだす」の意に解しうる。この発言は、じゅうらい書翰ジャンルの本質をついたものとされ、現代の研究者からも、書翰文の特徴を説明するさいに、よく引きあいにだされてきた。また、右で引用した魯迅の発言、すなわち、書簡文は「眞実により近い」ものであり、「作家自身の簡潔な注釈」になりえるという特徴とも、ふかかかわってくるものだろう。

だが私見によれば、この劉勰の発言は、六朝の美文書翰には適切とはいいにくいようだ。この「言を尽くす」という特徴、書翰文一般には通用するかもしれないが、すくなくとも六朝の「美文による」書翰文をつづるさいには、ふさわしいものとはいえない。それは、当時の書ジャンルの開放的な性格と関係している。すなわち、「言を尽くす」書翰文であれば、しばしば個人の秘奥に属する事がらもつづることになる。そうした書翰文は、信頼できるひとにだけにだけよんでもらい、第三者によまれることは想定していないはずだ。ところが当時の感覚では、書翰文は幅広い社交や対人関係のなかでつづられるものであって、なかば公開的な性格を有していた。個人と

個人、あるいは発信人と受取人のあいだだけで完結せず、他人の目にさらされやすかったのだ。それゆえ、真に自分のいいたいことを存分にはきだしたなら、「現代とどうしよう」具合がわるいことになりやすかったのである。具体例をあげよう。たとえば、もし書翰のなかで「オレは　がきらいだ。　もだいつきらいだ」と「言を尽く」したとき、　や　がだれかによつては、たいへんなことになりかねなかった。じつさい六朝期には、この種のことをつづつてしまつて、たいへんなことになつてしまつた人物がいた。その人物が竹林七賢のひとり、魏の嵇康である。

嵇康の友人に山濤という男がいた。あるとき彼は転任することになり、自分の後任の吏部郎に、親友の嵇康を推薦しようとした。すると嵇康は、山濤は自分の仕官嫌いを理解しておらぬとして、山濤に絶交をいいわたす書翰「与山巨源絶交書」（『文選』卷四三）をかきおくつたのである。ところが、嵇康はその書翰をつづつたさい、なにをおもつたか、

每非湯武而薄周孔。在人間不止此事、会顯世教所不容。此甚不可一也。

私はいつも湯王や武王を非難し、周公や孔子を軽侮しております。世間においても、こつした態度をあらためなかつたら、きつと世間の道徳に許容されないことでしょう。これが、私のたいへん具合のわるいことの第一です。

と「言を尽く」してしまつたのだつた。旧時では、どんな発言でも政治的に解釈されやすい。この発言はタイムングがわるく、まさに政治的に、しかもわるいほうに解釈されてしまつたのである。

魏末の時期、勢力をのばしてきた司馬氏は、魏王朝を篡奪せんとして機会をうかがっていた。嵇康のこの書翰文は、まさにその時期にかかれたのだつた。ときの司馬氏の領袖だつた司馬昭は、嵇康書翰中のこの一節をしる

や、嵇康をにくんだ。その結果、嵇康は司馬昭や「その配下の」鍾会によって、べつの事件で連坐させられ、あえなく刑死させられてしまったのである。

書翰中のこの語句が、なぜ嵇康の命をつばつことになったのか。魯迅は有名な「魏晋の気風および文章と薬および酒の関係」という講演で、まさにこの書翰のこの語句をとりあげ、

司馬懿（司馬昭がただし。魯迅の勤ちがい——福井）はこの文章がもとで、嵇康を殺しました。湯王、武王、周公、孔子を否定するのは、現代ではなんでもありません。だが当時はたいへんなことだったので。湯王と武王は、武力で天下を平定した人です。周公は幼い成王を補佐した人です。孔子は堯、舜を祖述し、そして堯・舜は天子を禅譲した人です。嵇康はそれをみんなだめだといった。では、司馬懿（司馬昭——福井）が帝位を奪うにはどうすればいいでしょう。手だてがありません。この点で、嵇康は司馬氏のやることに直接の影響を与えました。それで、どうしても殺されねばならなかった。（『而已集』 学習研究社「全集」

第五卷

と説明している。魯迅がいうように、司馬昭は湯武や周公らの「王朝を交替させた」前例を踏襲して、魏の曹一族から帝位を篡奪しようとしていた。そうした状況のなかで、嵇康の「湯王や武王を非難し、周公や孔子を軽侮しております」という一節は、「帝位篡奪をねらう」司馬昭やその一族を批判し、魏晋交替に反対したものと解されてしまったのだ。この一節、直截に魏晋交替に反対したものではないが、当時の政治情勢では、そう解されてもしかたがない語句だった。嵇康は当時の名士であり、いわば世論形成に影響力つよい人物である（しかも彼の妻は、魏王室のひとだった）。そうだとすれば、こうした危険な人物はいかしておけない、ということになったのだらう。このケース、嵇康としては他意はなく、ただ「言を尽く」しただけかもしれない。しかし、彼の真

意がどこにあつたにせよ、ときと場合とをかんがえたとき、あまりにも不用意な語句ではあつた。

六朝のころは、書翰文は回しよみされるのがふつうで、信書の秘密などという觀念はとぼしかった。そのため書翰で「言を尽くす」ときは、世間にしられることを覚悟しておかねばならなかつた。嵇康もそうしたことは、しつていたはずだ。だが、親友の山濤あての書翰ということで、うっかり気をゆるしてしまったのだろう。この場合、山濤が悪意でもつて、司馬昭に注進におよんだわけではあるまい。山濤やその仲間が、この嵇康の書翰文を回しよみしているうちに、やがてその危険な発言が司馬昭の耳にとどいてしまったのだろう。

もちろん、この嵇康の件は特殊なケースではあるう。だがいっばんに、書翰文で「言を尽くす」ことは危険なことであり、「ごくごく慎重にせねばならなかつた。そうしたことは当時の人びとも知悉しており、家族や親友など信頼できるひと以外には、軽々に「言を尽く」さなかつたのである。⁽³⁾

それゆえ我われは、書翰文には事実や本心が叙されているとはかぎらぬことを、よく認識しておくべきだろう。じつさい当時では、内心は立身したくてたまらないのに、書翰文では「隠遁したい」とかいたりするのは、めずらしいことではなかつた。⁽⁴⁾したがって、現代の我われが当時の書翰文をよむときは、本心はどうなのかと慎重にみきわめてゆく必要があるう。書翰文にかかれたことを、「本人がそうかいているのだから、そうにちがいない」と軽々に信じてしまつては、足もとをすくわれる心配もないではないのである。その意味で、六朝書翰文をよんでその真情を把握するのは、なかなかむづかしいことだといわねばならない(後述)。

二 殷周の書翰文

書翰ジャンルの性質や文章の特徴をみてきたが、つづいて、上古から六朝にいたるまでの、書翰文の歴史をざっとみわたしておこう。

まず、書翰文なるものは、いつごろから、かかれはじめたのだろうか。「用件や考えを他につたえる」という書翰の性格をかんがえれば、文字が発生したころから書翰、あるいは書翰のはたらきをする文書は、存在していたとかんがえてよからう。すると、著名な、あるいは現存するという条件を課さなければ、最古の文字たる甲骨文のころから、書翰「の前身」はかかれていたのではあるまいか。

じつさい、黄維華『書信的文化源起与歴史流变』（『江海学刊』一九九六（三））は、郭沫若『卜辞通纂』の議論をひきながら、甲骨文のなかにも、書翰の用をなしたものがあつたはずと主張されている。すなわち、殷代のころすでに、西北の辺境から河南安陽の都へ軍事情報をつたえる「辺報」があつたらう、とされるのである。これはたしかに、おおいにありえる推測だろう。たとえば甲骨文研究において、甲骨の文には神意をうらなうもの以外に、記事刻辞というものがあつて、卜占用の亀甲や獣骨の貢納に関する内容がかかれていますという。そうした甲骨が現に存するとすれば、軍事情報をつたえる「現在からみれば書翰のはたらきをなす」甲骨も、存在していた可能性はじゅうぶんありえるだろう。

ただ、そうした殷代のころの書翰については、現物を確認するのが困難である。それゆえ、書翰文の歴史といったとき、ふつうには、周代に開始したとされることがおおいようだ。以下で、これまで指摘されてきた書翰文の

源流について、はやい順からあげてゆき、それぞれ検討してみることにしよう。

まず第一に、周初の召公奭「君奭」(『尚書』中の一篇)からはじまる、とする見かたがあった。すなわち、清の姚鼐は『古文辞類纂』書説類の解説において、

書説類者、昔周公之告召公、有君奭之篇、春秋之世、列国士大夫或面相告語、或為書相遺、其義一也。戦国説士、説其時主、当委質為臣、則入之奏議、其已去国、及説異国之君、則入此編。

書説の類には、むかし周公が召公に勧告した「君奭」という篇(『尚書』所収)がある。ついで春秋の世になると、列国の士大夫たちは面とむかつてかたりかけたり、文書をつづっておくったりしたが、その趣旨は「君奭」とおなじである。戦国の策士たちの言辞のうち、君主に策を説くさい、臣礼をとつて家来になつておれば、その言辞は奏議の類に編入した。いっぽう、彼らが国をさつて、異国の君主に策を説いたときは、この書記の類にいれた。

とのべている。姚鼐は春秋のころ、列国の外交交渉における対応のことは、つまり辞命の類も書翰の仲間だとみなしたようだ。それらもふくめたなかで姚鼐は、周初の「君奭」を最古の書翰だとかんがえたのだろう。

おなじく清の曾國藩も、『經史百家雜鈔』序(書牘類)において、

書牘類、同輩相告者、経如君奭、左伝鄭子家、叔向、呂相之辞、皆是。後世曰書、曰啓、曰移、曰牘、曰簡、曰刀筆、曰帖、皆是。

書牘の類は、同輩が報告しあつた文書である。『尚書』の「君奭」篇や『左伝』中の鄭子家、叔向、呂相たちの言辞は、すべてこの書牘に該当する。後世に、書といい、啓といい、移といい、牘といい、簡といい、刀筆といい、帖というが、それらはすべてこの書牘の仲間である。

とのべ、やはり「君爽」を書翰文のはじめににおいている。

この姚鼐と曾國藩の議論で注意しておきたいのは、兩人とも書翰文を「列国の士大夫たちは……文書をつつておくたりした」、「同輩が報告しあつた」などのべ、君臣関係がない者どうしの往来文書を、書翰だとみなしていることである。こうすることによって、書翰の文と上奏の文（臣下が君主にたてまつつた文書）とを、弁別しているわけだ。書翰文の歴史を叙するためには、「書翰文とはなにか」を確定しておかねばならないので、かく「類似する文章との」弁別の基準を説明したのであるが、合理的な弁別法だといってよからう。そうした手続をしたうえで、兩人とも「君爽」を最古の書翰文だとしているのである。

この『尚書』中の「君爽」は、周公が召公にむかつて、成王が自立しても自分が周廷をさらぬ理由を、弁明した篇だとされている。召公は当初、周公が成王にとってかわる意図があるのではないかと危惧していたが、この弁明によって了解したらしい。この周公と召公とは、周廷では同格（君臣関係ではない）の重鎮だ。その意味では、同格の者どうしのやりとりということになり、「君爽」を書翰文のはじめにもつてきてもおかしくはない。ただ現在の研究レベルからみれば、この「君爽」は史官の記録であることはうごかず、真に周公そのひとが筆をとつた書翰文とはかんがえにくい。

つづいて第二に、周初の「君爽」でなく、周東遷後の春秋時代の作を、書翰文のはじめだとする見かたも存する。それが『文心雕龍』書記篇である。そこで劉勰は、

三代政暇、文翰頗疎。春秋聘繁、書介弥盛。繞朝贈士、会以策、子家与趙宣、以書、巫臣之責、子反、子産之諫、范宣、詳觀四書、辞若対面。又子叔敬叔、進弔書于滕君、固知行人挈辞、多被翰墨矣。及七国献書、詭麗輻輳。

夏殷周の三代の世は、政治も繁忙ではなかつたので、書翰文をだすこともまれだつた。春秋になると諸国

間の使者往来がおおく、書翰の交換もおおくなつた。繞朝は士会に策書をあたえ、子家は趙宣に書翰をおくつた。また巫臣は書翰で子反を非難し、子産は書翰で范宣をいさめた。これらの四篇の書翰文をみてみると、あたかも対面してものをいうかのごときだ。さらに子叔敬叔は、滕君に悔やみの書翰文を奉呈したが、これによつて使者が口上をつたえるときは、墨書したものをもつていたことがわかる。戦国の七雄が書翰を往復させるころは、その文辞は詭弁さと華麗さとが交錯していた。

とのべている。まず夏殷そして西周のころは、「書翰文をだすこともまれだつた」（文翰頗疎）というだけで、書翰の源流にはふれていない。これは慎重な姿勢というよりも、上古のころの書翰の様相など、劉勰もよくわからなかつたのだらう。ところが春秋になると、諸国間での使者往来がしげくなつたので、書翰の交換もおおくなつたとし、代表的なものとして、秦の繞朝の策書など四例をあげている。いずれも『春秋左氏伝』に引用されるもので、すべて君臣関係でない人びとのあいだでの文書往来である。

もうひとり、南朝梁に活躍した任昉も、春秋に書翰がはじまつたとかんがえていたようだ。彼は「文章緣起序」のなかで、晋の公族だつた羊舌肸（あざなは叔向）の「貽鄭子産書」に言及して、

六経素有歌詩書誄箴銘之類。尚書帝庸作歌、毛詩三百篇、左伝叔向貽子産書。

六経にはもともと、歌詩書誄箴銘の類がそなわつてゐる。たとえば『尚書』では舜帝みずから歌をつくつてゐるし、『毛詩』には三百篇があるし、また『左伝』には、叔向（羊舌肸のあざな）が子産におくつた書翰文が引用されている。

とのべている。これは、六経には各種の文学ジャンルがそなわつており、書ジャンルについては、羊舌肸の書翰が『左伝』昭公六年にひかれてゐる、とのべたものだ。『左伝』には、「右で劉勰が指摘したものなど」たくさん

の書翰が掲載されている。それなのに他でなくこの羊書翰をあげたのは、任昉がこれを代表的なものとかんがえたからだろう。

第三に、これらよりすこしくだつて、書翰文は戦国時代にはじまったとする意見もある。たとえば明の呉訥は、戦国の燕の名將、楽毅の「報燕惠王書」に端を発するとみなすようだ。すなわち彼は「文章弁体」の「書」の序説において、

按昔臣僚敷奏、朋旧往復、皆総曰書。近世臣僚上言、名為表奏。惟朋旧之間、則曰書而已。蓋論議知識、人豈能同。苟不具之於書、則安得尽其委曲之意哉。戦国両漢間、若樂生、若司馬子長、若劉歆書、敷陳明白、弁難懇到、誠可以為修辭之助。

むかしは、臣僚が奏上した文書や朋友が往復した文書などは、すべて「書」とよんでいた。だが近代になると、臣僚の上奏したものは「表」や「奏」などと呼称するようになり、ただ朋友が往復した文書だけを「書」とよんでいる。おもつに、各人の議論や認識能力などは、どうしておなじはずがあるう。それらを文書にかきしるさなければ、委曲をつくせるはずがない。戦国や両漢においては、楽毅や司馬遷、劉歆たちの書翰文がかかれた。それらは、明瞭な陳弁ふりと懇切な論難ぶりがそなわっているので、作文の助けにすることができよう。

とのへてている。ここでも吳訥は、「書」字はもともと、臣僚の上奏と朋友の書翰の両方を意味していた。だが「近世」になると、前者は表や奏と呼称するようになり、後者のみを書とよんだ——といって、歴史的立場から「姚鼐や曾國藩とおなじような」上奏と書翰の弁別をおこなっている。そしてそのうえで楽毅がかいた書翰文を、その最初にあげているのである。

この呉訥があげる楽毅の「報燕惠王書」は、私見によれば、文学的にはなかなかの傑作ではないかとおもふ。この書翰がかかれた経緯を紹介すれば、楽毅は燕の昭王を補佐して、当時の大国だった斉をうちやぶる殊勲をあげた。弱小の燕だけではかなわぬとみて、周辺の諸国と連合した作戦が功を奏したのだ。楽毅は、その後も斉の七十余の城をくだし、あと二城をのこすばかりとなったが、そのときに昭王が亡くなってしまった。ところが息子の恵王がたつや、恵王は斉の離間策を信じて楽毅の忠節をうたがい、燕の將軍職を解任した。そこで危機感をおぼえた楽毅は、趙の国へ亡命してしまったのだ。ところが楽毅が趙につかえるや、たちまち趙は国力をつよくし、燕を圧迫するようになったのである。すると燕の恵王は後悔して、楽毅に謝罪の書翰をおくった。これをよみ、楽毅が燕の恵王におくりかえした返書が、この「報燕惠王書」である。

この書翰中で楽毅は大意、つぎのようにのべる。私は先王（昭王）に信任され、斉をやぶる功績をあげることができました。おかげで領土をいただくこともできたのです。それなのに趙へ亡命したのは、私が讒言によって罪人とされると、自分を重用してくれた先王の名まで、はずかしめることになるとおもったからです。私はそれを忌避せんとして、燕を出国いたしました。いま、私は趙につかえておりますが、かつての故国である燕を攻撃するつもりはありません。ただ恵王さまの側近が私を理解してくれぬのをおそれ、こういう不幸な状況にたちいたったのです——と。

この楽毅「報燕惠王書」は、先王への恩義をかたりつつ、自分の政治的立場を誠実にかたった書翰であり、その葛藤になやむ心情は、旧時の人びとの胸をつったようだ。司馬遷は『史記』楽毅伝にこの書翰を引用し、その「太史公曰」で、「斉の蒯通と主父偃は、楽毅の燕王への書翰をよむと、いつも書巻を置いて涙をながさぬことはなかったという」とのべ、間接的に彼の誠忠ぶりをたたえている。たしかにこの楽毅書翰は、秦漢よりまえにか

かれた書翰文としては、最古かどうかという問題はさておき、内容の切実さや充実ぶりという点では、もっともすぐれたものと評してよからう。

以上、書翰文の源流について、じゅうらいの諸説を紹介してきた。書翰文がいつからはじまったかなど、常識的にかんがえて、「ここから」と特定できるはずもない。右の指摘も、源流を特定するというより、この時期から書翰文らしきものが出現した、という程度のものなのだろう。

ただ、殷周の書翰文「とされるもの」で注意したいことは、殷の辺報にせよ、春秋戦国の書翰にせよ、大なり小なり政治にからんだ文書であるということだ。さきに見た楽毅書翰も、複雑な政治情勢のなかでつづられたものだった。その点で、これらは純粹に私的な用件をつづったものとはいいがたく、我われがふつうに了解している「私的な内容を叙した書翰」とは、いささか距離があるものといわねばならない。

もっとも旧時では、それはやむをえないことなのだろう。私的なレベルでの書翰の応酬（来週ふたりで酒をのむとか、ちよつと食料をわけてくれないかとか）は、文字が人間の意思を伝達する機能をもつかぎり、上古でもおこなわれていたはずである。しかし、それらは我われが手にし、よむ文献としては、ほとんど現存していない。それは、ただ散逸したというだけでなく、政治的実用を有した文書だけが、保存して後世につたえる価値があり、そうした効用にとぼしい私的書翰は、保存するにあたいしない——とする判断がはたらいたからだろう。中国では伝統的にそうした文章観が存在している。そうした意味でも、私的な書翰はのこりにくかったのである。

だが、そうした残存しにくい私的書翰が近時、僅少ながら発見されるようになった。それは、各地から出土しつつある簡牘類のことである。これら新出簡牘のおおくは、法令や帳簿などの行政文書のたぐいなのだが、わずかながら、卑近な用件を叙した私的書簡もまじっている。たとえば、「は元氣にやっていますか」とか「先日におくったよ」などのような。

この種の書翰は、一読すれば用事がおわってしまつので、そのままうちすてられてしまつのがふつうである。それゆえ、そうした私的書翰が残存するはずはないのだが、なにかの偶然によって保存されることがあつた。そしてそれが近時、時間の淘汰をくぐりぬけて出土しつつあるのである。こうして、我われは当時の私的書翰を、おのが目で確認することができるようになった。当時の書翰往来の一断面として、そうした私的書翰の一二を紹介してみよう。つぎにしめすのは、いずれも秦のころの手紙である。

まず、湖南省の里耶古城遺跡(二〇〇二年発見)から発掘された、秦代の書翰を紹介しよう。⁽⁵⁾ この里耶秦簡の年代は、秦王政二十五年(前二二二)から秦二世のころ(前二〇八)までにわたるといふ。するとつぎの書翰(74)も、そのころにかかれたものだろう。

欣敢多問呂柏、得毋病。柏幸賜欣一牘、欣辟席再拜及拜者。柏求筆及黑、今敬進柏令、寄芍、敢諷之。

恐れ多いことですが、欣から呂柏様にご挨拶させていただきます。ご健康にお変わりはございませんでしょうか。恐れ多くも貴方様よりお手紙を賜り、避席して三拝させていただきます。貴方様がお求めになつて

おられる筆と墨をここに献上いたしますとともに、苟に託してこれら筆や墨などを届けさせて頂きます。身の程をわきまえず拝謁させていただきますことをお許しください。

この「欣」と「呂柏」「苟」は人名だろう。右の全文を訓読すれば、「欣敢へて呂柏に多問す。病むこと毋きを得んや。柏は幸いに欣に一牘を賜わり、欣は席を辟けて再拜し拜に及ぶ者なり。柏の求めし筆及び黒、今敬みて柏令に進ぜんとし、苟に寄せしむ。敢へて之に謁す」となる。この書翰は、呂柏から筆と墨を要求されたことに対し、欣が返信したものらしい。筆と墨をお送りしたので、お受けとりくださいという内容である。受取人の呂柏は、目上の人物だったのだろう、欣はかなり丁寧に返書をしたためている。文中の「貴方様よりお手紙を賜り、避席して三拜させていただきます」ということは、感謝の極みという姿勢をあらわすようだ。このことば、ただの慣用的なあいさつにすぎないのだろうか。それとも目上からの手紙に対して、当時の人びとは、ほんとうに避席して三拜していたのだろうか。

ついで、湖北省の雲夢県睡虎地（一九七五年発見）から発掘された書翰文を紹介しよう。この睡虎地秦墓にふくまれる書翰文は、はやく一九七六年の『文物』第一期に公表され、新出土の秦代書翰として有名になったものである。そのため、これまでもおおくの研究論文がかかっている。そうした研究によって、冒頭にある「二月辛巳」という日付けは、秦王政二十四年（前二三三）のことだろうと推定されている。したがってこの書翰の執筆年は、前二三年二月十九日ということになる。書翰をかけた月日までわかるといって、めずらしいケースである。

二月辛巳、黒夫驚敢再拜問中。母母恙也。黒夫驚母母也。前日黒夫与驚別、今復会矣。黒夫寄乞就書曰、遺黒夫錢、母操夏衣來。今書即到、母視安陸絲布錢可以為禪君襦者、母必為之、令与錢偕來。其絲布貴、徒操

銭來、黒夫自以布此。黒夫等直佐淮陽、攻反城久、傷未可智也。願母遺黒夫用勿少。書到、皆為報。報必言相家爵來未來、告黒夫其未來狀。聞王得苟得母恙也。辞相家爵不也。書衣（依）之南軍。……

二月十九日、私たち黒夫と驚は、再拜して兄の中（衷）様にご挨拶申します。お母様はお元氣ですか。黒夫と驚はともに元氣であります。過日、私黒夫と驚とは離れ離れになっておりましたが、いまはまた一緒におります。

以前、黒夫が送りました手紙にて、「銭を送ってもらい、夏の衣服をお送りいただく必要はございません」とお願い申上げました。もしこの手紙が届いたとき、お母様には安陸の糸と布の値段が安く、衣服（裙・襦）が作れるのであれば、それを買って衣服を作り、銭と一緒に送ってください。もし糸と布が高ければ、銭だけを送ってください。黒夫が自分で布を買って衣服をつくります。私たちは淮陽の戦いに参戦し、（淮陽の）反乱した城邑を攻めることが久しく、負傷者の状況は未だによく分かりません。お母様が少くない費用を送っていただくをお願いします。この手紙が届きましたら、いずれもご返事ください。返事の際には、必ず私が賜った家爵を受けたかどうかをお知らせください。もし家爵を受けていなければ、その原因を黒夫に教えて下さい。王得もなお変わりなく元氣かどうかっております。賜った家爵を受けとつたでしょうか。手紙は南下する軍隊に託します。……

ここの「黒夫」と「驚」は、淮陽の戦争にかりだされた兄弟らしい。その兄弟が兄の「中（衷）」に、この手紙をかいた、ということのようだ。その内容は、自分たちは無事だと報告しながら、あわせて衣服とお金をおくってほしい、と依頼したものである。ながいので後半を略したが、略した部分に「新負（新婦）」という語がでてくる。すると「驚」は少年ではなく、妻帯者だったらしい。

なお、右の引用の最後で「手紙は南下する軍隊に託します」とあるので、この書翰は、軍隊に委託しておくてもらったようだ。近時、各地から出土した簡牘を解読することによって、行政文書を送送する郵置システムが、当時すでに存在していたことがわかっている。ただ、それは公的な文書をおくる場合であり、私的な書翰文まで配達してくれるわけではあるまい。すると私的なものは、自分で信使をやとつとか、知友におくりとどけてもらうとか、自分で送達の方法をくふうせねばならなかつたろう。この場合の「南下する軍隊に託します」というのは、軍隊に「いる知りあいに託して」おくりとどけてもらう、ということなのだろうか。

この種の私的な書翰文、発見されたものはまだ少数だし、またそれがいくらか発見されたとしても、文学史をぬりかえるほど、価値のあるものは出現してこないだろう。ただ、これらの書翰文をすることによって、我われはこの種の実用的書翰の蓄積のうえに、歴史にのこるすぐれた書翰文がかかれたことに、あらためて思いをはせることができる。そして両者を比較することによって、やはり残存すべきものが残存し、そうでないものがぎえていったことを、了解することができるにちがいない。

では、欣や黒夫、驚らの書翰がかかれた秦漢の時代において、歴史にのこるすぐれた書翰文とは、具体的にどんな作をさすのだろうか。すると、偽作の疑いがある李陵「答蘇武書」などをのぞけば、やはり前漢の司馬遷「報任少卿書」が、のこるべくしてのこった佳作だといってよからう。では、この司馬遷の書翰をよみながら、この作が卓越する理由をかんがえてみよう。

司馬遷は武帝の治世下、太史公だった談の子として成長し、父の死後、その遺命によって『史記』執筆に力をそそいでいた。ところが李陵の禍に連座して、宮刑に処せられてしまう。その後、ゆるされて中書令となった彼のもとに、ある日、友人の任安（あざなは少卿。このときは益州刺史）から書翰がとどいた。それは、「貴殿は

もつと賢人を推薦すべきである「のに、それを実行していない」と批判する内容だった(佚)。遷は、これに返事をださなかった。いやだせなかつた。ところがそれから数年たつや、書翰をだしたその任安が、戻太子の乱に連座して死刑に処せられることになったのだつた。いよいよ任安の死刑執行の日がせまってくる。司馬遷は、この期においては、返事をつづるときはないと観念した。そこで彼は獄中の任安にむかつて、自分の思いをうちあけた書翰文をつづつたのだつた。それがこの「報任少卿書」である。

この書翰は一見すると、冷静にかかれたかのようにみえる。だがじつさいのところは、李陵の禍の不条理さをかたり、自分を弁護してくれなかつた友人や朝臣への、つよい憤懣の情が書翰の奥に渦まいている。彼はこの文章のなかで、宦者にされた屈辱をかたり、自分はもはや世間にでられぬ、恥ずべき人間になってしまった。そんな自分に、貴殿は「賢人を推薦すべきだ」というが、そんなことなどできるはずがないではないか——とつづたえたのである。書翰の末尾ちかい部分を引用しよう。

僕以口語遇此禍、重為郷党所笑、以汚辱先人。亦何面目、復上父母丘墓乎。雖累百世、垢弥甚耳。是以腸一日而九迴。居則忽忽若有所亡、出則不知其所往。每念斯恥、汗未嘗不發背沾衣也。

私はよけいなことをいっただため災禍にでくわし、さらに郷里の人びとの笑いものにされて、亡父の名をはずかしてしまいました。いっただいなんの面目があつて、父母の墓にお参りできましようか。たとえ百世たつても、この恥辱はふかまるばかりです。このため、日に腸が九たびもねじれるかのようです。家居しては、茫然と重要なものを逸したかのよう、外出しても、ゆく先もわからぬようなありさまです。この恥辱を想起するたび、いつも汗が背にうかび衣服をぬらすのです。

司馬遷は任安にむかつて、自分の心の奥に秘めていた思い、すなわち宦官とされて「亡父の名をはずかしめ」

たことの無念をかたり、「たとえ百世たつても、この恥辱の思いはひどくなるばかりで」、「腸が日に九たびもねじれるかのよう」だ、と赤裸々にぶちあけている。清の林雲銘はこの書翰を、「一篇全体に悲愴な思いがあふれ、涕泣するがごとくうったえるが」とした。おそらく始めから終わりまで、「一気呵成にかきつづつたのだらう」（『古文析義』巻八）と評している。この評言は肯綮にあつたものだらう。司馬遷は、刑死をまじかにした任安にだけ、こうした心の深奥をぶちまけることができた。いいかえれば、それ以外の者にはいえなかつたのであり、それだけ彼の苦悩はふかつたのである。そうした苦悩のふかさが、後世の読者に感動をよびおこすのだらう。

この秦漢のころから、私的な感慨や用件を叙した書翰文が、右の司馬遷書翰以外にも、史書等にいくらか記録されはしめる。たとえば、爵位をつしめない庶人とされたことへの無念を叙した楊惲「報孫会宗書」、隠者のありかたを論じた李固「遣黄瓊書」、夫婦の情愛をかたつた秦嘉「与妻書」や「重報妻書」、およびその妻徐淑の返書「答秦嘉書」などがそれである。さらにこの時期には、自分の息子や一族の子弟に訓戒をたれた書翰もすくなくない。孔蔵「給子琳書」、張奐「誠兄子書」、劉向「戒子歆書」、馬援「誠兄子嚴敦書」、楊礼珪「敕二婦」、杜泰姫「教子」「戒諸女及婦」、鄭玄「誠子益恩書」などがそれだ。これらは概して短篇のものがおおいが（ほんらいは、もっとながかつたのだらう）、いずれも真摯に教訓をたれたものである。

これら西漢にかかれた書翰をよんでみると、文飾はとほしいが、内容は真剣さを有し、読者の心をつつものがおおい。また虚構めいた発言がほとんどみられないのも、この時期の書翰の特徴である。その意味でこの時期の書翰文こそ、劉勰のいう「言を尽くすにふさわしいもの」といつてよからう。

四 六朝の書翰文

さて、秦漢までの書翰文の歴史を駆けあしでみわたしてき、ようやく六朝の入口までたどりついた。この期の書翰文の実態については、別稿でくわしく論じる予定なので、ここでは、六朝書翰の内容が信用するにたり、「作家自身の簡潔な注釈」になりえるのか——の問題に注目しながら、そのありようを概観してみよう。

六朝にはいると、書翰の文は「よくもわるくも、洗練されてきた」といってよい。では、「よく洗練された」とは、どんなことをさし、「わるく洗練された」とは、どんなことをいうのか、私なりに説明してゆこう。

まず、「よく洗練された」ほうからいえば、文章が潤色されてきたことが、それである。たとえば右でもひいた褚斌杰氏の同書が、

やがて六朝となり、駢文が興起するにともなって、辞藻を重視し雅致を追求した、純文学的性格をもった書簡小品が出現してきた。これらは文采上からいえば、称賛すべき箇所もないではない。(同書一四七頁)

というように、六朝期になると、「純文学的性格をもった書簡小品」が発生してきた。ここで氏が指摘される「辞藻を重視し」「雅致を追求した」なるものが、なにを意味するのかはつきりしないが、おそらく書翰の文章が潤色されて、格調たかい表現になったことをさすのだろう。具体的には、書翰文の冒頭に優美な時候のあいさつが布置されること、対偶や典故を駆使した美文でつづられること、そして山水や艶情まで叙されて内容がゆたかになること——などがあげられよう。

いっぽう、「わるく洗練された」ほうは、内容に虚飾がおおくて、信用しにくくなったということだ。両漢あ

たりまでは、書翰文にかかれていることは、「もちろん例外もあるが」概して事実であり、真実の思いを吐露したものと解してよかつた。ところが六朝の書翰文となると、その内容が事実であり、真情を吐露しているかは、かなりあやしいというべきであり、慎重に判断せねばならなくなってきた。具体的な例としては、「注4であげたような」内心は立身したくてたまらないのに、書翰文では「隠遁したい」などとかくケースがそれだ。六朝ではそうしたたぐいの、虚飾ふう内容がふえてきたのである。

六朝の書翰文はこうした、「よくも（＝文章が潤色される）わるくも（＝内容に虚飾がおおい）洗練されてきた」傾向を、大なり小なり有しているといつてよい。このことを了解してもらうためには、そうした特徴を具備した事例をしめすのが早道だろう。するとふさわしい事例として、蕭繹こと梁元帝がかいた「又与武陵王紀書」という書翰文があげられそつだ。以下、この書翰文を考察してみよう。

梁王朝の末期、ようやく侯景の乱を終息させた蕭繹（武帝の第七子。五〇八～五五五）は、承聖元年（五五二）十一月に江陵で皇帝の位についた。だがそれ以前から、都の健康を占拠されていた梁の皇族たちは、侯景にあやつられる簡文帝（在位五四九～五五一）に見切りをつけ、おのが根拠地で自立の動きをつよめつつあった。それゆえ、いまさら蕭繹が即位したといつても、彼らはその政権に服従しようとはしなかつたのである。

元帝の弟にあたる蕭紀（武帝の第八子。五〇八～五五三）も、そのひとりだった。彼は元帝より七か月はやく、同年四月に蜀の地で皇帝を称していたので、いまさら後にひけず、兄の元帝と対立することになってしまった。かくして蕭紀は、侯景討伐を名目にして軍をひきいて東下し（侯景は承聖元年四月に殺害されていた）、翌二年（五五三）五月には西陵にいたつて、元帝の軍勢と対峙した。ただし状況は、兄軍のほうが優勢であった。元帝が西魏に要請して、蕭紀の根拠地たる蜀地に軍を侵入せしめたので、蕭紀はおのが根拠地もあやうくなつてしまつ

ていたからだ。⁶ そうしたなか同年六月、元帝は弟にむかってこの書翰「又与武陵王紀書」をおくったのだった。その書翰を『南史』⁷ 蕭紀伝からひけば、つぎのようなものである。

甚苦大智。季月煩暑、流金爍石、

「聚蚊成雷、
封狐千里。」

以兹玉体、辛苦行陣。乃着西顧、我劳如何。

自「獯醜憑陵、吾」年為一日之長、膺此棗推、事歸当璧。儻遣使乎、良所希也。

「羯胡叛換、
属有平乱之功、

如曰不然、於此投筆。友于兄弟、分形共氣。兄肥弟瘦、無復相代之期、

「讓棗推梨、
長罷歡愉之日。」

「上林静拱、
聞四鳥之哀鳴、心乎愛矣、書不尽言。」

宣室披図、嗟万始之長逝。

「ごくろうだな、大智よ。六月の猛暑たるや、金をとかし石もやくほどだ。蚊の羽音は雷のようだし、

狐もあちこちに出没している。

そのなか、おまえはみずからたつて、軍隊を指揮している。私はおまえのいる西方をながめやつては、だいじょうぶかなと心配しているよ。

夷狄どもがのさばり、羯胡どもが跋扈しているなか、私は年長であり、多少の功績もあつて、衆人によつて推戴され、けつきよく即位することになった。もしおまえが使者を派遣して「私の践祚をみとめて」くれるのなら、ありがたいんだがな。

だが、おまえが納得できぬというのだったら、もうこれ以上、この書翰をかきつづけることもない。我われ兄弟は親密で、身体はべつでも精神はつながっていた。だが、「趙兄弟のように」兄がふとり弟がやせていても、もはや身代わりになることはできぬ。「王泰と孔融のように兄弟で」棗や梨をゆずりあう仲だったが、そんな親愛の日々はとおい昔となった。上林苑で静座していても、鳥が四方に離別する哀声聞きこえ、宣室で書物をひらいても、「陸機陸雲兄弟の」万始亭の惜別をなげくだけ。心からおまえのことをおもっているよ。手紙では思いをいいつくせない。

この書翰文（これで全文）は、表面的には、過去のうるわしい兄弟の情を想起しながら、現今の対立状況をなげたものとみなせそうだ。元帝は、当時の書翰の定型たる三段構成（「時候のあいさつ、相手のようす、自分の近況」という構成、右引用の）はこれに対応している）に依拠してつづっている。その構成にしたがって、以下で概観してみよう。

まず、時候のあいさつとの相手のようすとは、兄弟両軍の対決さなかという状況のせい、きわめて簡略である。はじめに「六月の猛暑たるや」云々ときびしい暑さを叙し、ついで「そのなか、おまえはみずからたつて、軍隊を指揮している」云々と、蕭紀のようすを想像しつつ、ねぎらいのことばをかけている。戦いのさなかとはいえ、いかにも兄らしい行文だといつてよい。

つぎの「夷狄どもがのさばり」以後が、この書翰の中心部分となる。ここで元帝は自分の近況、つまり自己の践祚とその後の状況をかたつている。夷狄ども（侯景とその一党）が南方の地を跋扈したなか、私は梁室のなかで年長であり、また侯景をたいらげた功もあつて、衆におされて帝位についた。ついで、おまえ（蕭紀）も使者を派遣して、私の践祚をみとめてくれれば、ありがたいのだがな、という。かく近況をのべたあと、元帝は

「おまえが納得できぬというのだ」たら（如曰不然）以下で、弟（蕭紀）と訣別する覚悟をかたつてゆく。それでも元帝は、内心で弟と訣別する意志をかためながらも、けつしてあらあらしい罵言などはなげつけない。いかに六朝期の洗練された貴人らしく、典故をひきつつ典雅に、そして対偶を構成しつつ華麗に、兄弟訣別をかなしむことばをつつてゆくのである。

この隔句対「兄肥弟瘦、無復相代之期、讓棗推梨、長罷歎愉之曰」につかわれた典故について、その概要を紹介してみよう。まず「兄肥弟瘦」二句では、後漢の趙兄弟の故事をもちいている（『後漢書』趙孝伝）。当時、天下に飢餓がひろまっていた。賊が弟の趙礼をとらえて、その身をくおうとした。すると兄の趙孝は、自縛して賊のもとへゆき、「弟はやせています。肥満した私が弟の身代わりとしてくわれます」といった。賊はおどろいて二人とも解放した、という話である。

ついで「讓棗推梨」二句のほうは、二つの典拠をもつ。「讓棗」は梁の王泰の故事。彼がまだ数歳だったとき、祖母が孫や姪をあつめて棗栗を床上にちらばせた。他の子はみなきそつて棗栗をとつたが、王泰だけはとらない。祖母がどうしてとらないのかとたずねると、王泰は「とらなくても、きつともらえるからです」とこたえたという。また「推梨」は後漢の孔融の故事。彼が四歳のとき、兄といっしょに梨をたべた。孔融はいつもちいさい梨をとるので、大人がどうしてかとたずねると、融は「私はこどもですから、ちいさいほうで充分です」とこたえた、という話だ。いずれも兄弟間の友愛や謙讓を意味する、うるわしい話柄だといつてよい。この四句のいわんとすることは、我われ兄弟はかつて、この典故のごとく仲むつまじかった。だが現今たるや、「もはや身代わりになることはできぬ」「親愛の日々はとおい昔となった」といつことなのである。

そして元帝は、最後に「上林苑で静座していても云々」「宣室で書物をひらいても云々」と、兄弟が別離する

意の典故二条（詳細は注6）を引用して、自分たちの訣別を暗示しつつ、この書翰文をとじている。このとき、元帝の軍と蕭紀の軍とのあいだでは、すでに攻防がはじまっていた。そうした緊迫した状況のなか、元帝は軍の指揮や作戦立案などで多忙だったに相違ないが、それでも典故や対偶を多用した（また平仄も整齊している）右のごとき美文書翰を、さつとつづったわけだ。その操筆立成の能力たるや、おどろくべし。

こうした、一見せつなそうな美文書翰をおくった元帝——。だが、彼はこのとき、兄弟訣別という悲痛な情緒のなかでたゆたうどころか、きっぱり骨肉の情をすてさっていた。西魏の軍と連携し「弟の根拠地の」蜀地に侵入させるという有利な情勢下、元帝は友愛のひとつから非情のひとつへと人格をきりかえ、弟を殺害する意志をかためていたのだった（注6も参照）。書翰で「使者を派遣して「私の踐祚をみとめて」くれるのなら、ありがたいがな」とつづっているが、これは舌先三寸の巧言にすぎず、じつさいは彼は蕭紀殺害を決意していたはずだ。その意味で、書翰中の「もはや身代わりになることはできぬ」「親愛の日々はとおい昔となった」ということは、兄弟の訣別をなげいているのでなく、じつは弟の殺害を決意し、予告したものであったのである。

しかし弟の蕭紀のほう、おろかだったのか、ひとがよすぎたのか、書翰文の真意にも、兄の決意にも、気づかなかつたようだ。書翰中の「兄弟間の友愛や謙譲を意味する」うるわしい典故にまどわされ、兄が自分を殺害する意志をかためたとはい、おもいいたらなかつたのだろう。

この書翰をよんだ蕭紀は、敗戦必至の状況をさとり、臣下を派遣して和睦の道をさぐった。しかし殺害を決意した元帝は、もはや相手にしてくれない。兄の軍に包囲された蕭紀は、舟上で長椅子のまわりをはしりながら、兄軍の將に金をなげて「もついちど兄にあわせてくれ」と懇願したという。彼はこの期におよんでも、兄にあつて命乞いすれば、ゆるしてもらえらるとおもっていたのだろう。この蕭紀の懇願に、兄軍の將は殺害を躊躇し、包

困したまま時間が過ぎてゆく。だが、元帝の決意はゆるがない。前線からのそうした報告をつけるや、元帝は「けつして弟をいかしてはならぬ」と軍を督励したのであった。そしてついに、かけよってきた「蕭紀の」息子ともども、舟上で蕭紀父子を斬殺せしめたのである。『南史』蕭紀伝はその最期を、

「兄軍の兵は」刃を抜き舟に升起、左右より奔り擲る。第五子「の蕭」円満は馳せ来たりて父に就くも、「蕭」紀の首既に落つるや、円満の軀も亦た分かれり。

と叙している。ときに承聖二年（五五三）七月、享年四十六であった。元帝が「又与武陵王紀書」をつづつてから、ほぼ一か月後の死だった。

この元帝「又与武陵王紀書」においては、文面の兄弟の訣別をなげくことばと、内心の冷酷な心情とのあいだに、はげしい落差が存在している。文辞のうえで、対偶や典故で装飾しつつ兄弟友愛の情をつづり、現今の対立をなげいていた。しかしそのじつ、内心では「弟を殺害するぞ」と決意をかためていたのだ。元帝は「老子」をこのんでいたという。この「老子」は無為や柔弱の道を説いた書物だ。舟輿があつてもぬることなく、武器があつても使用することのない、小国寡民の世界を理想としていた。だが、このときの元帝の心中には、そうした老子的柔弱の精神は、影も形ものこつていなかった。元帝はさつさと柔弱の精神や兄弟のきずなと訣別し、おのが権力の確立をもとめたのである。

この元帝「又与武陵王紀書」をよんだ明の張溥は、

問読梁元帝与武陵王書。言「兄肥弟瘦、讓棗推梨、上林靜拱、宣室披図」。友于之情、三復流涕。漢明東海、詞無以加。乃縱兵六門、參夷流血。同室之鬥、甚于寇讎。外為可憐之言、内無急難之痛。狡人好語、固難以嘗測也。

ちかごろ梁元帝（蕭繹）の「又与武陵王紀書」をよんだが、そこにつきぎのような一節があった。「かつては兄弟でたすけあつてきたが、もはや援助することはできぬ。兄弟でゆずりあつてきたが、もうたのしい時期はおわたつたのだ。上林苑で静座していても、鳥が四方に離別する哀声がきこえ、宣室で書物をひらいても、「陸機陸雲兄弟の二万始亭の惜別をなげくだけ」。ここには兄弟の親愛の情がこもっており、何度よみかえしても涙がでてくるほどだ。後漢の明帝（兄）と東海王劉蒼（弟）とは兄弟仲がよかつたというが、それとて、この蕭兄弟以上ではなかつたろう。

ところが、その元帝は六門に武威をふるつて、肉親を殺戮したのだ。骨肉どうしの争いが、寇仇との戦いよりも激烈だつたのである。彼は、書翰のなかで恩情あることばをつらねながら、内心では容赦する気などもちあわせていなかった。狡猾な人間が発するきれいごとたるや、まことに真意がうかがいしれぬものだ。

とよべている（『漢魏六朝百三家集』梁元帝集題辭）。この張溥の批評は、書翰中のうるわしい発言と現実の冷たな心情との、はげしい落差を率直に指摘したものだ。たしかに、うるわしい書翰文をおくつたあと、さつさと弟を殺戮した元帝の行為には、どうにも弁護のしようがない。さらに元帝は、蕭紀を殺害したあと、蕭一族のなかから彼の籍をぬき、「饜饕」（財貨をむさぼるといふ伝説上の怪物の名。古代の銅器などに刻されている）という姓をたまわつたといふ。彼がいかに蕭紀を憎悪していたかが、よくうかがえるエピソードだ。その意味で、張溥の「狡猾な人間が発するきれいごとたるや、まことに真意がうかがいしれぬものだ」という評言には、現代の我われも同意せざるをえないだろう。

五 簡潔な注釈たりうるか

以上、「よくも（＝文章が潤色される）わるくも（＝内容に虚飾がおおい）洗練されてきた」六朝書翰の事例として、「又与武陵王紀書」をきつとみてきた。この元帝書翰、たしかに対偶や典故によって潤色された文章と、虚飾のおおい内容とを有していることが、了解できたのではないかとおもふ。

こうした書翰、なかでもその文章と内容とのほげしい落差をまのあたりにして、書翰文は「作家自身の簡潔な注釈でもある」という魯迅のことばに、疑念を感じたひともあるかもしれない。「元帝は書翰中で本音をかたつていなかった。かく本音をかたつていない以上、書翰は作家自身の注釈にはなりえないのではないか」と。しかし、その疑念はただしくない。「南史」元帝伝末尾では、元帝の性格について、

性好矯飾、多猜忌。於名無所假人。微有勝己者、必加毀害。

うまれつき虚飾をこのみ、猜疑心がつよかった。自分の名声が他人におとることをきらった。それゆえ、すこしでも自分より名声たかき人物がおれば、かならず危害をくわえたのだった。

と評している。とすれば、この落差はげしき「又与武陵王紀書」の行文こそ、そうした元帝の「うまれつき虚飾をこの」んだ性格への、適切な注釈だといえるのではあるまいか。元帝のこの書翰は、その潤色やきれいごと発言によって、虚飾をこのんだ彼の性格を、かえって裏うちしてくれているのだ。その意味で書翰文は、やはり「作家自身の簡潔な注釈」になりえるものだといつてよからう。

ただし、こうした書翰文を、本人理解の適切な注釈とするためには、我われはほんやり表面だけよんで、満足

してはならない。炯眼をひからせながら、文章の潤色やきれいごと発言のなかから、虚実をよりわけ、本心をよみとつてゆかねばならないのだ。それさえできれば、書翰を「作家自身の簡潔な注釈」にすることもできるだろう。

では、そうした炯眼を身につけるには、どうすればよいだろうか。もちろん「行間をよむ読解力をみがくこと。それにつきる」といわれれば、それはそのとおりだろう。だが、そうした言はやさしく行はかたい方法でなく、凡人でも虚実をみわけられる簡便な方法はないだろうか。

私見によれば、万能ではないけれども、有効な方法がないではない。それは書翰の文体、つまり文章スタイルに注目することである。というのは、私がこれまで書翰文をよんできた範囲では、書翰の文章スタイルの洗練ぶりと内容の虚飾ぶりとは、比例していたように感じられるからだ。具体的にいえば、文章が対偶や典故を多用すればするほど、内容もたてまえふう発言がおおくなってきた。だから潤色や美辞麗句にまどわされず、本心はなにかと慎重にのみすめてゆかねばならない。いっぽう、対偶や典故をつかわず素朴な文章であれば、その内容も、かぎりのない、率直なものになりやすい。だから、発言をそのままストレートに理解してよい——ということになる。

実例をあげよう。文章スタイルの洗練度がたかい、つまり内容が信頼しがたい作は、もちろん右の元帝「又与武陵王紀書」がそれである。この作は対偶や典故を多用して、美的文章にねりあげられていた。そうであれば、口をつけてでることばも、いきおい気どった（＝信用しがたい）ものになりやすいわけだ。

いっぽう、文章の洗練度がひくく、内容が信頼できるのはなにかといえは、右でみた欣や黒夫、驚らの書翰がそれだろう。これらの文章には、どんな気どりも偽善もないといってよい。というより、そんな高レベルの心の

動きを表現すべき、作文能力をもちえなかつたといふべきかもしれない。

では六朝期にかかれた作で、そうした信頼できる書翰文はないのかといえ、内容や行文がこれによく似た王羲之の尺牘がそれだろつ。たとえ、

「胡桃帖」足下所疏、云此果佳。可為致子、当種之。此種彼胡桃皆生也。吾篤喜種果。今在田里、惟以此為事。故遠及足下。致此子者、大惠也。

貴殿のお手紙に、「この果実は味がよい。あなたにおくるので、うえてみてください」とありました。当地でその胡桃をうえたところ、すべて芽をだしました。私は果樹をうえるのがだいすきです。いま田舎におりますので、いつもこんなことをしています。ですから、はるばる貴殿にお願いします。この種をお送りいただければ、すぐくつれしく存じます。

「節近感歎情深帖」十二月二十二日羲之白。節近、感歎情深。得去月二十三日書、知君故苦。日耿耿、善護之。往不。僕得大寒疾、不堪甚。力還不具。王羲之白。

十二月二十二日、羲之がもうしあげます。節句がちかづき、感慨ぶかくなりました。先月二十三日のお手紙を拝領し、貴殿が以前から「病気で」お苦しみだとしました。毎日、心配しています。おだいじにしてください。貴殿はゆかれるご予定ですか。私も大寒の病をわずらい、ひどくよわっています。不具。王羲之。

などである。これらは、たぶん事実そのままであり、この尺牘の本心はどこにあるかなどと、よけいなことはかえなくてよかつ。

以上、本稿では書翰ジャンルについて、そのあらましをみわたしてきた。それは、書翰文が有する性質、文章

の特徴、六朝にいたるまでの歴史、六朝書翰のおおざっぱな傾向、そして作家の簡潔な注釈になりえるかどうか——などであった。ここまでのべてきたような事がらは、へつに斬新な知見というほどのものではない。むしろ、六朝の書翰文を研究してゆくうえで、前提とすべき事がらであり、基礎中の基礎といふべきものだろう。我われはこうした基礎や前提をふまえたうえで、いつそう六朝書翰の深部へふみこんでゆかねばならないのである。

注

(1) 「書翰」は、日本では「書簡」とかくのがふつうだろう。だが、六朝ではもっぱら書翰のほうをつかうので、本稿では標題もふくめ、「書翰」の語にしたがった。

(2) ただし斯波六郎「文筆考」(初出は一九四二)、『六朝文学への思索』(所収)では、書翰文を大幅に拡大して理解している。同論によれば、六朝でいう「筆」「手筆」の語は書翰文を意味するという。そして、

およそ書翰文とは、空間的に距離の有る特定の相手に、或る用件を知らせる文書であると考えれば(本章で「書翰文」というのは、皆かかる広義の用法にしたがっているのである)、右の書激・表章・詔策・諡義も、皆、書翰文の範囲に属することとなる。

とのべている(同書四五頁)。こうした考えのもとに、氏は書翰文(=筆=手筆)に表章や詔策の類もふくませて、議論をすすめられているのである。

もっとも本稿では、そうした斯波氏のお考えにしたがわず、書翰文を実質的に「書」「啓」「箋」ジャンルに限定している。かく書翰文の定義の面では、斯波氏の理解とことなってしまうが、斯波氏の同論は、六朝書翰文を総合的に考察したものであり、本章をかくうえで多大の啓発をつけた。六朝書翰文を論じたものとしては、現在でもこれ以上の詳細なものがかかれておらず、戦前の執筆ということをかんがえれば、突出した業績だといふべきだろう。

- (3) 「言を尽く」せる相手や機会がすくなかったからこそ、その書翰は力作になりやすかった。あとでのべる司馬遷「報任少卿書」こそ、そのめずらしい「言を尽く」した書翰文だといえようし、また六朝書翰としては、曹丕「与吳質書」や曹植「与楊徳祖書」、そして本文であげた嵇康「与山巨源絶交書」なども、それにつく珍奇な傑作だといってよからう。
- (4) 『文心雕龍』情采篇において、当時の詩文は「内心は高位をのぞんでいくせに、隠遁をうたいあげ、心中で世俗の権勢に執着しているくせに、そらぞらしく仙界を叙したりする」（原文は「有志深軒冕、而汎詠皋壤、心纏幾務、而虛述人外。真宰弗存、翩其反矣」とのべている。すると劉勰は、「書翰もふくめた」詩文の内容をそのまま信じられぬことは、よくしていったらうとおもわれる。したがって、彼の「書翰は言を尽くす」「云々の発言は、おそらく」「かくあつてほしい」という理想論をのべたものと解さねばなるまい。劉勰の真意はおそらく、さしさわりのない範囲で（嵇康のように殺害されぬ範囲で）言を尽くしなさい、ぐらいいのことだったのだらう。
- (5) 秦代書翰の引用（原文・翻訳とも）は、いずれもつぎの論文から。呂静・白晨「秦簡に見える私的書信の考察 漢簡私信との比較」（塩沢阿美・畑野吉則の訳。藤田勝久・関尾史郎編『簡牘が描く中国古代の政治と社会』所収。汲古書院 二〇一七）。
- (6) 元帝は「又与武陵王紀書」中で、「夷狄どもがのさばり、羯胡どもが跋扈しているなか」「云々とつつつている。ところが彼は、その夷狄や羯胡たる西魏に要請して（承聖二年 五五三 三月）、蕭紀の根拠地（蜀地）に軍を侵攻させ、蕭紀を圧迫しているのである。かく西魏軍を蜀地へ侵攻させた時点で、元帝は弟の殺害を意識していたと解してよからう。この前後における、梁元帝と蕭紀の深刻な対立については、前島佳孝「西魏・北周政権史の研究」第二部第三章「梁武帝死後の西魏・梁閔係の展開」（汲古書院 二〇一三）を参照。
- (7) 「又与武陵王紀書」に「又」字がついているのは、この直前「元帝が弟の蕭紀に「与武陵王紀書」をおくつていて、これが一度目の書翰だったからである。一度目の書翰は、「弟よ、おまえが軍を蜀へかえしたなら、その地の支配権をみとめてもよいぞ」という内容だったが、蕭紀はこれを拒否したのだった。蕭紀としては、大軍を東下させてきた以上、蜀地

の保障程度で軍をかえすわけにいかなかったのだろう。さらに、その兄書翰が「皇帝敬みて假黃鉞太尉武陵王に問う」云々とほじまっていたのも、彼の癪にさわたたにちがいない。蕭紀としては、弟ではあっても、自分がさきに天子を称している。そうした自分が、いまさら兄を「皇帝」とみとめ（つまり自分の踐祚を撤回して）、臣事するわけにはいかなかったのだろう。『南史』蕭紀伝では、一度目の書翰をつけとるや、蕭紀は「元帝の」命に従わず。「元帝に」書を報ゆるに家人の礼の如くせり」と対応したと叙している。蕭紀が「家人の礼の如」き返書をおくたのは、元帝（蕭繹）は天子ではなく家族の一員にすぎぬ、といたいのだろう。こうした対応は、自分と兄とは対等だという彼の心情をしめしている。なお、元帝「又与武陵王紀書」への注釈は以下のとおり。訳注をつくるにあたっては、『二十四史全訳 梁書』同南史（漢語大詞典出版社）を参照した。

大智——蕭紀の、もうひとつのあざな。蕭繹はふだん、蕭紀を「大智」とよんでいたのだろう。だからこの書翰でも、「大智」とよびかけたのだとおもわれる。

聚蚊成雷——『漢書』中山靖王勝伝に「衆煦は山を漂わせ、聚蚊（蚊）は雷（雷）を成す」とあり、後句をそのまま利用したもの。

封狐千里——「封狐」は大狐の意で、上句の「聚蚊」と対をなす。すると「千里」は、大狐が視覚的にずっととはびこるさまをいい、上句の「成雷」は、蚊の羽音が聴覚的に程度がつよいさまをいうのだろう。

玉体——ここでは蕭紀の身体をさし、つまり蕭紀そのひとをいうのだろう。

乃眷西顧——『詩』大雅皇矣に「乃ち眷として西に顧みて、此に維れ与に宅る」とあり、前句をそのまま利用したもの。

我勞如何——『詩』小雅縣蠻に「道の云に遠ければ、我が勞は如何ぞや」とあり、後句をそのまま利用したもの。ここでは前後から、「我は」「汝は」「如何ならんと勞う」と訓じた。前句とともに『詩』の典故を利用して、重厚な表現になるよう意図したものだろう。

一日之長——『論語』先進に「子路、曾晰、冉有、公西華、侍坐す。子曰く、吾一日爾らに長ぜざるを以て、吾を以てする毋かれ」とある。

樂推——よろこんで推戴する、の意。『老子』に「聖人上に処るも民は重しとせず。前に処るも民害とせず。是を以て天下は楽しみ推して厭はず」とある。

当壁——壁をつめた場所のうえにたつ、の意。君主となる兆しをいう。楚の共王は、自分の五人の息子のうち、壁をつめた場所のうえにたつた者を、太子とすると神にちかつたという故事（『春秋左氏伝』昭公十三年）。

儻遣使乎、良所希也——「儻し使を遣わすならば、良に希む所なり」と訓じる。この二句は蕭紀にむかって、婉曲に「自分の賤祚をみとめて従属せよ」といつているのだらう。なお『梁書』は、この「希」を「遅」字につくる。すると「良に遅つ所なり」と訓じることになるが、意味的には大差ない。

投筆——筆をなげすてて、もうこれ以上この書翰をかかない、の意。この二字には、後漢の班超の故事（投筆從戎）をふまえ、「筆をなげすてて戦いにのぞむ」のニュアンスをふくむのかもしれない。

友于兄弟——兄弟が仲のよいこと。尚書「君陳の「惟れ孝なれば兄弟に友なり」にもとづく。

分形共氣——兄弟の仲がきつてもきれぬほど、密接であること。もとは『呂氏春秋』精通の「父母の子に於けるや、子の父母に於けるや、一体にして兩つに分れ、同氣にして息を異にす」にもとづく、父母と子女の関係が密接なことをいったが、のち、兄弟の間でもつかうようになつた。

兄肥弟瘦——『後漢書』趙孝伝の故事をふまえ、兄弟の友愛の情がふかいことをいう。後漢のころ天下に飢饉がひろまっていた。賊が弟の趙礼をとらえて、その身をくおうとした。すると兄の趙孝は、自縛して賊のもとへゆき、「弟はやせています。肥満した私が弟の身代わりにくわれます」といった。賊はおどろいて二人を解放したという。

讓棗推梨——梁の王泰と後漢の孔融の故事をふまえ、兄弟間の友愛や謙讓を意味する。「讓棗」のほうは、梁の王泰がまだ数歳だったとき、祖母が孫や姪をあつめて棗栗を床上にちらばせた。他の子はみなきそつて棗栗をとつたが、王泰

だけはとらない。祖母がどうしてとらないのかとたずねると、王泰は「とらなくても、きつともらえるからです」とこたえたという。また「推梨」のほつは、後漢の孔融は四歳のとき、兄とともに梨をたべた。孔融はいつもちいさい梨をとるので、大人がどうしてかとたずねると、融は「私はこどもですから、ちいさいほうで充分です」とこたえたという。四鳥——別離、あるいは別離するひと、の意。『孔子家語 顔回』に「桓山の鳥、四子を生む。羽翼既に成るや、將に四海に分かれんとす。其の母は悲鳴して之を送る」とあるのをぶまえる。もとは親子のわかれをいうが、のちに兄弟の別離にも使用するようになった。

万始——「万始」は駅亭の名。陸機「於承明作与土龍」に「塗を長林の側に分かち、袂を万始の亭に揮う」とあって、万始亭での兄（陸機）弟（陸雲）の別れを叙している。すると、この「万始」はたんなる地名ではなく、兄弟の別れを意味するのだらう。

心平愛矣——心中にしたいこのむ、の意。『詩 小雅 臨桑』に「心に愛す、避そ請わざらんや。中心に之を感す、何れの日にか之を忘れざらんや」とあり、初句をそのままつかっている。